

# 韓国児童文学と日本

## 併合一〇〇〇年に思う

仲村 修

### 1 韓国児童文学の成長

・少年運動のなかでそだった児童文学

両国の近代児童文学の発展様相はとてもよく似ている。  
(巡回)口演童話、童話劇、童話の全盛、児童雑誌の興隆、レコード童謡、放送局のコドモノ時間、放送児童劇団・合唱団……と。むろん朝鮮が宗主国日本の文化的影響を強く受けざるをえなかったことを考えれば、なにも納得のいかない話ではない。

信じるにたる政府をもつことのかなわなかった朝鮮では、民族の意思が宗教団体や、民族資本になる新聞社の意思という形をとって噴出することがよくあった。

なかでも孫秉熙(ソンビョンヒ)の指導した三・一独立運動(一九一九年)の大噴出は失敗にお



[方定煥]

わったものの、その涙と反省のなかから「実力養成運動」「啓蒙運動」が噴出した。孫の娘婿の方定煥(ジャンジョンファン)をはじめとした天道教(東学党を改称)の青年会幹部らは、少年会も立ち上げて全国に支会をつくり、次代の噴出に望みをつないだ。キリスト教や仏教も少年会をつくった。日本の近代的な口演童話や創作童謡も行事にどしどし取り入れた。二〇年に創刊した東亜日報・朝鮮日報・時代日報の各民族紙は各地の少年運動を後援し記事にした。

ただし、日本との差異も見える。天道教少年会機関誌の『オリニ』の場合、一八年段階でみると月に七二ページで十銭。これに対して「内地」の『少年世界』は二五六ページで四〇銭、『赤い鳥』は一五八ページで四〇銭である(いずれもほぼ菊版)。この差異の主たる原因は児童文化に投入できた父母の経済力の差であろう。さらに言えば、物的人的な資源を思うさま収奪した宗主国と、逆に収奪されっぱなしの植民地の経済力の差だったと考えられる。

・金素雲(キムソンウン)も李元寿(イウォンス)も孫牧人(ソンモクジン)も少年会育ち  
金素雲は、二〇年に叔父が釜山でつくった七〇名の絶影